

研究ノート

保育者養成校における専門科目の学びの特徴に関する検討

—ラーニング・パターンを用いた試み—

京林 由季子（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

新山 順子（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

要旨：本研究では、保育者養成校における学生の学びの特徴を明らかにすることを目的に、ラーニング・パターンを活用した授業の学びの振り返りを試みた。対象は、2022年度に開講された3つの専門科目の受講学生である。3つの専門科目は、グループワークを主として実践や課題研究を行う科目であり、いずれも授業課題への主体的・対話的な参加が望まれる実践的科目である。授業の振り返りで学生が選択したパターンは、『自省』、『実行力』、『仕上げ』の 카테고リーに属するものの割合が高く、各授業のねらいに沿った学びを概ね経験できていることが確認された。さらに、ラーニング・パターンの活用は、学生が自身の学びを意識化し言語化することの助けとなる可能性が推察された。

キーワード： 保育者養成, 学び, パターン・ランゲージ, ラーニング・パターン

I. はじめに

保育士養成課程や幼稚園教諭養成課程の保育者養成カリキュラムでは、教職課程コアカリキュラムにおいてシラバスに模擬保育を含めることが明示されていることもあり（文部科学省，2017），実践的授業が多く展開されている。筆者らが所属する岡山県立大学保健福祉学部子ども学科（旧子ども学専攻）でも、2010年の「県大そうじゃ子育てカレッジ」の開設以来、学生と親子との交流を専門科目の中で「協働授業」として積極的に展開するとともに、2021年度の子ども学科の開設に伴い子育て支援に関する新規科目を開講するなど、実践の積み重ねと振り返りを大切に保育者の養成を行っている。

ところで、実践的授業に参加する受講学生がねらいに沿った学びを経験できている

のかどうか、学びの特徴を確認することは授業改善を行っていく上で重要である。一方、体験や活動が中心となる実践的授業では、「体験や活動が自分の中で言語化できずに、自身の学びの履歴が活動参加目録（＝カタログ化）となっているのではないか」（山出，2022）とする危惧もある。振り返りの時間を設けるだけでなく、どのように受講学生の振り返りを行うかを検討していく必要もあろう。

そこで本研究では、保育者養成校における実践的授業において、ラーニング・パターンを活用した授業の振り返りを試み、受講学生の学びの特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象

本研究では、幼稚園教諭養成課程および保育士養成課程を持つ岡山県立大学保健福祉学部子ども学科の専門科目の内、2022年度に開講された「子育て支援プロジェクト研究A」、「保育内容(人間関係)の指導法」、「基礎ゼミナール」の3科目の受講学生を研究対象とした。対象授業3科目のねらい、対象学年と人数、授業構成の概要は表1に示す通りである。「子育て支援プロジェクト

研究A」の主要な内容は親子に向けた夏祭りの企画・実施であり、5班に分かれて遊びのコーナー遊びを担当するものであった。「保育内容(人間関係)の指導法」の主要な内容は、模擬保育としてミニミニクリスマス会での親子に向けた出し物を2班に分かれ発表するものであった。「基礎ゼミナール」は子ども学領域の現状と課題について6班に分かれ、各班で具体的テーマを設定

表1 対象授業の概要

	子育て支援プロジェクト研究A	保育内容(人間関係)の指導法	基礎ゼミナール
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の子育て支援の現状や「おかやま子育てカレッジ」の役割について理解し、連携の在り方等について説明することができる。 ・地域の子育て支援の行事への学生参画の方法を検討し、仲間と協力して実践や交流を行うことができる。 ・協働的な実践やその報告を通して、成果の共有を行い新たな課題を見出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育内容の領域「人間関係」のねらいと内容、指導上の留意点を理解し説明できる。 ・模擬保育への取り組みを通して保育を構想し実践する方法を身に付けることができる。 ・幼児の人との関わりを育む指導について省察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文献検討、フィールドワークを通して、子ども学及び関連領域における国内外の対象者の現状や課題を理解し、アカデミック・スキルおよび地域貢献に求められる対人的な力を養う。 ・子ども学関連領域の研究対象の現状と課題を理解し説明できる。 ・地域貢献に必要な対人的な力(コミュニケーション能力・協調性等)を養い実践できる。 ・アカデミック・スキルの基礎を学び活用できる。
学年/人数	1年生28名	1年生28名	2年生25名
授業構成	授業の構成(全8コマ・集中) <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーションと学内子育てひろばの見学 ②地域の子育て支援の現状、及び「おかやま子育てカレッジ」の役割(専門家の講話) ③子育てひろば行事への学生参画の方法 ④親子プログラムの計画と準備 ⑤実践及び交流 ⑥実践の振り返りと評価 ⑦地域の子育て支援の現場の実践(学外・見学) ⑧成果の共有と課題の確認(成果報告会) 	授業の構成(全8コマ・後期) <ol style="list-style-type: none"> ①領域「人間関係」のねらいと内容 ②人とのかかわりをはぐくむ様々な保育教材 ③年齢に応じた遊び ④模擬保育の教材研究 ⑤模擬保育の指導案作成 ⑥模擬保育の準備 ⑦模擬保育(ミニミニクリスマス会)の実践 ⑧模擬保育実践の振り返り 	授業の構成(全15コマ・通年) <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②③④教育・保育・福祉の課題と研究 ⑤⑥班別研究の計画と準備 ⑦中間発表会(各班の研究計画発表) ⑧⑨班別研究の計画と準備 ⑩⑪班別研究成果の発表準備 ⑫⑬最終発表会(各班研究成果発表、中・四国学生研究大会代表の選考) ⑭代表班提出動画作成、学校紹介動画作成 ⑮第63回中・四国保育学生研究大会(オンデマンド開催)への参加と発表

し課題研究を実施するものであった。いずれの科目も、グループワークを主として実践や研究を行う実践的科目であり、授業への主体的・対話的な参加が望まれる科目である。

なお、「子育て支援プロジェクト研究 A」に関しては、別途授業実践について報告している研究報告(新山・京林, 2024)から必要なデータを参照し、他授業との比較に用いる。

倫理的配慮として、本研究の関係者には、趣旨を丁寧に説明し、資料の収集や使用許可を得ている。

2. ラーニング・パターン

本研究では、対象授業の振り返りにラーニング・パターンを用いた。ラーニング・パターンは自律的で創造的な学びの秘訣を言語化したものであり、井庭崇により開発されたパターン・ランゲージの一つである(井庭, 2014)。パターン・ランゲージは、元々建築分野で発展し、その後、人間の行為の秘訣を記述するために応用されるようになったものである。どのパターンも、ある「状況」(Context)において生じる「問題」(Problem)と、その「解決」(Solution)の方法がセットで記述され、それに「名前」(パターン名)がつけられるという構造を持つことで、パターン名(名前)に多くの意味が含まれ、それが共通で認識され、「言葉」として機能するようになっている(クリエイティブシフト, 2023)。

3. 振り返りの実践

対象授業の振り返りには、クリエイティブシフト社製の「ラーニング・パターン<カード>」の1番から39番の39枚のカード(図1)、および、経験チェック表を用いた。

「子育て支援プロジェクト研究 A」と「保育内容(人間関係)の指導法」については、すべての実践終了後の次の授業回に、学生に39枚のカードの表面を並べたものを眺めてもらい、各授業での自身の学びの経験を3つ選択し経験チェック表に印をつけるよう指示した。続いて、学生同士でのシェアとして最初の10分は自身の班の受講生と、次の10分では他の班の受講生とペアになり、そのパターンを選んだ理由を相互に話す時間を設けた。最後に、各自の経験チェック表に3つのカードを選択した理由を記入させた。「基礎ゼミナール」については、授業回数の関係から、受講生同士のシェアの時間をとることができなかったため、39枚のカードから自身の学びの経験を3つ選択させ、その理由を経験チェック表に記入させた。

以上の対象授業の振り返りに参加した「子育て支援プロジェクト研究 A」の28名、「保育内容(人間関係)の指導法」の25名、「基礎ゼミナール」の25名の学生の経験チェック表を分析対象とした。



図1 ラーニング・パターン<カード>

III. 結果及び考察

1. 学生が選択したパターンの割合

対象授業の振り返りで、学生が選択したパターンの割合を表2に示す。

「子育て支援プロジェクト研究A」では、最も多かったパターンは『16. 動きの中で考える』50.0%であり、「実際に試してみても、その場に合わせた動きができ」など、予想とは違う子どもの動きに合わせ臨機応変に対応できたことを自らの学びの経験と

して言及していた。次に多かったパターンは『34. 自分で考える』28.6%であり、準備の段階から「子どもの目線に立って」考えたことや、実践の場で「常に頭を動かしながら」考えたこと、「保護者とのコミュニケーション」を考えたことなどを挙げていた。

「保育内容（人間関係）の指導法」では、最も多かったパターンは『25. 魅せる力』56.0%であり、「どうすればより楽しいもの

表2 学生が選択したパターンの割合

カテゴリー	番号	パターン名	子育て支援プロジェクト研究 A(n=28)	保育内容（人間関係）の指導法 (n=25)	基礎ゼミナール (n=25)
コア	1	学びのチャンス	3.6	8.0	4.0
	2	つくることによる学び	25.0	24.0	4.0
	3	学びをひらく	3.6	0.0	0.0
学び始め	4	まずはつかる	7.1	8.0	0.0
	5	まねぶことから	25.0	12.0	16.0
	6	教わり上手になる	3.6	0.0	4.0
実践のなかでの学び	7	アウトプットから始まる学び	0.0	4.0	12.0
	8	外国語の普段使い	0.0	0.0	0.0
	9	学びの中の遊び	0.0	0.0	4.0
学びの連鎖	10	学びの竜巻	3.6	4.0	4.0
	11	知のワクワク！	3.6	4.0	16.0
	12	量は質を生む	3.6	12.0	4.0
鍛錬	13	身体で覚える	14.3	4.0	0.0
	14	言語のシャワー	0.0	0.0	4.0
	15	成長の発見	10.7	4.0	4.0
実行力	16	動きの中で考える	50.0	36.0	20.0
	17	プロトタイピング	0.0	0.0	0.0
	18	フィールドに飛び込む	7.1	4.0	16.0
発想	19	鳥の眼と虫の眼	7.1	12.0	0.0
	20	隠れた関係性から学ぶ	0.0	0.0	0.0
	21	広げながら掘り下げる	3.6	8.0	12.0
創造	22	探求への情熱	0.0	8.0	24.0
	23	右脳と左脳のスイッチ	0.0	0.0	0.0
	24	小さく産んで大きく育てる	3.6	0.0	0.0
仕上げ	25	魅せる力	25.0	56.0	28.0
	26	「書き上げた」は道半ば	0.0	0.0	0.0
	27	ゴール前のアクセル	0.0	0.0	16.0
学びの仲間	28	学びの共同体をつくる	14.3	12.0	24.0
	29	偶発的な出会い	0.0	4.0	0.0
	30	ライバルをつくる	3.6	12.0	0.0
他者とのかわり	31	はなすことでわかる	17.9	0.0	24.0
	32	教えることによる学び	3.6	0.0	4.0
	33	断固たる決意	0.0	0.0	0.0
自省	34	自分で考える	28.6	8.0	16.0
	35	目的へのアプローチ	25.0	44.0	32.0
	36	捨てる勇氣	3.6	4.0	4.0
突き抜け	37	フロンティア・アンテナ	0.0	0.0	0.0
	38	セルフプロデュース	3.6	4.0	4.0
	39	突き抜ける	0.0	4.0	0.0

になるか、反対に飽きさせないためにはどのようにつなげば良いか」練習を繰り返す中で考え実践できたことや、「揺らしたり、急に近付けたり、手でこそばせたり」など、子どもの興味を引き付ける動作の工夫ができたことを学びの経験として言及していた。また、「大きな振りで分かりやすく」、「子どもが聞き取りやすいようにゆっくり喋る」、「魅せる力をもっと工夫しなければ」と、自身の今後の課題への気づきに関する言及も見られた。次に多かったパターンは、『35. 目的へのアプローチ』44.0%であった。「親子に楽しい時間をプレゼントするという目標に向けて」、「班の人と協力しながら、合間を縫って練習をしたり、飾り、プレゼントの準備をしたり」など、より良いクリスマス会にしようとする目的に向かって突き進むことができたことに言及していた。また、「準備の過程でも、事後の振り返りでもこれを学ぶことができた」など、準備、実践、振り返りの一連の流れを通した学びへの言及も見られた。

「基礎ゼミナール」では、最も多かったパターンは『35. 目的へのアプローチ』32.0%であり、「一から考えるのが新鮮な経験だった」など、自分たちで課題研究のテーマを考え取り組んだことに関する言及や、「研究を始める段階でどのような結果で終わりたいということを考え、そこから研究のプロセスを組み、もし思っていた結果が出なかった場合はどうするのかというところまで考え研究の基盤を作ることがとても大切」など、思うような結果が得られなかった反省点を今後に生かしたいとする言及が見られた。次に多かったパターンは『25. 魅せる力』28.0%であり、「どのようなパワーポイント、

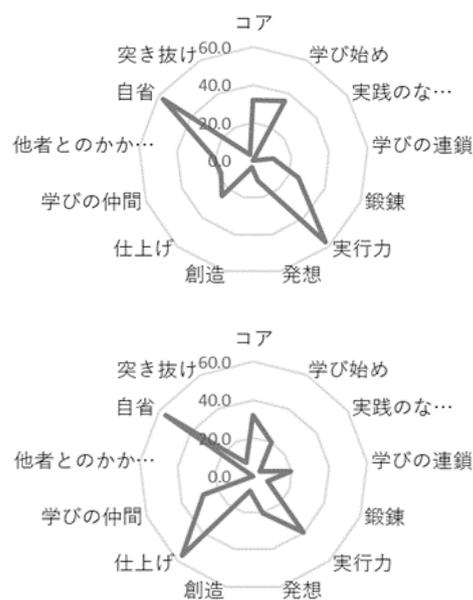


図3 保育内容（人間関係）の指導法

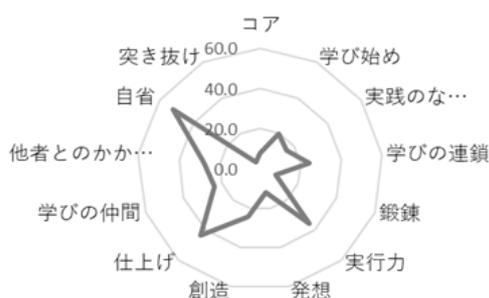


図4 基礎ゼミナール

原稿を用意すれば聞き手にとってわかりやすく伝えることが出来るか」など、中間発表や最終発表に向けて研究をまとめる活動を通して魅せる力が重要であると感じたことや、他の班の発表を見たことで、「より伝わる発表の仕方について学んだ」などの言及が見られた。

2. カテゴリーによる比較

対象授業における受講学生の学びの特徴を比較するために、内容的に関係の深いパターンを3つずつ束ねカテゴリーにしてリーダーチャートに示した（図2～4）。

「子育て支援プロジェクト研究A」では、

学生が選択したカテゴリーの割合は、多い順に『実行力』57.1%、『自省』57.1%、『学び始め』35.7%であった。『実行力』、『自省』のカテゴリーは学生の半数以上が選択しており、事前に共有したねらいの達成のために、適切な動き・援助は何かを学生は自ら意識し取り組んだものと推察される。

「保育内容（人間関係）の指導法」では、多い順に『仕上げ』56.0%、『自省』56.0%、『実行力』40.0%となっていた。受講生がグループ別に親子と交流するプログラムを企画し実施する点は「子育て支援プロジェクト研究A」と同様であるが、『仕上げ』を半数以上の学生が選択していることに違いが見られる。親子に見て楽しんでもらう出し物を企画し実践するという模擬保育のねらいの達成に向けて、学生は魅せる力を意識し取り組んだものと考えられる。

「基礎ゼミナール」では、多い順に『自省』52.0%、『仕上げ』44.0%、『実行力』36.0%となっていた。上位3つのカテゴリーは「保育内容（人間関係）の指導法」でも同様であるが、『他者とのかかわり』28.0%、『創造』24.0%、『学びの仲間』24.0%などを選択した学生も比較的多い。グループによる課題研究を通して、話し合いを深め、探求する学びへと、学生の学びの経験の広がりを感じられる。

IV. 総括と課題

本研究では、保育者養成校における学生の学びの特徴を明らかにすることを目的に、2022年度に開講された3つの専門科目の授業においてラーニング・パターンを活用した授業の学びの振り返りを試みた。学生が選択したパターンは、全体として『自省』

『実行力』、『仕上げ』のカテゴリーに属するものの割合が高く、実践や課題研究を主体的・対話的に行う実践的授業に共通する学びの特徴が見出された。また、学生の記述内容からは、各授業のねらいに沿った学びの内容を概ね経験できているものと確認できた。さらに、ラーニング・パターンを授業の振り返りに活用することは、学生が実践したことを振り返るだけでなく、自身の学ぶ姿勢や次の学びに向けての課題を意識化し言語化する手助けとなる可能性が示唆された。

本研究では、学びの振り返りにラーニング・パターンの活用を試みたが、限られた授業回数の中で実施するためには、実施方法についてさらに工夫が必要とされよう。また、学生の豊かな学びの経験につながるよう、学びの振り返りだけでなく、学びに対する姿勢を形成する活用方法についても検討していく必要がある。

謝辞

授業の実践にご協力いただきましたつどいのひろばの親子・スタッフの皆様、また調査にご協力いただきました地域の皆様により感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 天野美和子・野澤祥子・宮田まり子・秋田喜代美：「ミドルリーダー・パターン」を用いた主任保育者研修の検討，東京大学大学院教育学研究科紀要 59, 444-465, 2019.
- 2) 井庭崇：「創造的対話のメディアとして

- のパターン・ランゲージ：ラーニング・パターンを事例として」, Keio SFC journal 14 (1), 82-106, 2014.
- 3) クリエイティブシフト：「パターン・ランゲージとは」, <https://creativeshift.co.jp/> (参照 2023-10-20).
- 4) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会：「教職課程コアカリキュラム」, 文部科学省, 2017.
- 5) 新山順子・京林由季子：「保育者養成における子育て支援を実践的に学ぶ授業モデルの試行」, 岡山県立大学教育研究紀要 7 (1), 50-56, 2023.
- 6) 新山順子・京林由季子：「保育者養成における子育て支援を実践的に学ぶ授業モデルの検証」, 岡山県立大学教育研究紀要 8, 2024.
- 7) 野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美：「保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての「パターン・ランゲージ」の可能性」, 東京大学大学院教育学研究科紀要 57, 419-449, 2018.
- 8) 山出諭：「パターン・ランゲージを活用した授業実践報告：パターン・ランゲージを使い、リフレクションから各自のルーブリック作りを支援する」, ユマニテク教育研究所紀要(1), 148-155, 2022.

**A Study on the Characteristics of Learning Specialized Subjects
in Childcare Worker Education
-Trial Using Learning Patterns-**

Yukiko KYOBAYASHI*, Junko NIIYAMA*

*** Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University**

Abstract : In this study, we examined classes that utilize Learning Patterns with the aim of understanding the characteristics of student learning in childcare worker education. The target audience is students taking three specialized courses offered in academic year 2022. The three specialized subjects are practice subjects that mainly involve group work and problem research, and all subjects require independent and interactive participation in class assignments. Among the Pattern items selected by students, a high percentage of students answered 'reflection,' 'execution ability,' and 'finishing,' confirming that students generally felt that they were learning according to their goals. Furthermore, it was assumed that by utilizing learning patterns, students would be able to become aware of their own learning and verbalize it.

Keywords : Nursery Teacher Training, Learning, Pattern Languages, Learning Pattern